

国際会議  
報告

## APCHI2012 運営報告

高知工科大学 任 向実 / NEC 福住 伸一

山梨大学 郷 健太郎 / 東海大学 辛島 光彦

## 1. はじめに

2012年8月28日～31日の4日間、島根県松江市くびきメッセにて The 10th Asia Pacific Conference on Computer Human Interaction (APCHI2012) を開催した。本国際会議 APCHI シリーズは、ヒューマン・コンピュータ・インタラクション分野全体を対象としたアジア・パシフィック地域の代表的な国際会議であり、1996年の第1回よりこれまで、ほぼ隔年ペースで実施されてきた。今回が10回目の記念すべき大会となった。

APCHI2012には155件の投稿論文数があり、そのうち25.5%をLong talk、30%をShort talkとして採択した。さらにはポスター発表として89件を採択した。キーノートスピーカーとして、安西祐一郎教授（独立行政法人日本学術振興会）、Shumin Zhai氏（Google Research）、Marc Hassenzahl教授（Folkwang University）、木村朝子教授（立命館大学）をお迎えし、大会テーマ「Reflect, Discover and Innovate」の議論を行った。最終的な会議の参加登録者は26ヶ国255名で、盛況のうちに幕を閉じた。まずは、ご参加くださった多数の皆様、協賛企業・組織の方々に深く御礼申し上げたい。

本稿ではAPCHI2012の会議の準備から実施までの運営に関する筆者らの経験を報告する。今後APCHIまたは関連した国際会議を運営する上で参考情報となることを期待する。

## 2. APCHIの特徴と松江市開催における経緯

APCHIシリーズの特徴の一つは、ある程度の実施規模と歴史をもっているにもかかわらず、母体となる学会が存在しないことである。次の大会の実施国・地域を決める場合には、これまで主としてSteering Committee Chairである黒須正明教授（放送大学）とKee Yong Lim氏（Human Centered Analysis & Design, Singapore）の人脈に基づいていた。Steering Committeeの仕事は純粋にボランティアであり、しかも母体となる学会がないために、いわゆる上納金が発生しない。その意味で、大会を運営する側としては、APCHIという知名度を使って参加者予定者にアピールしつつ、しかも、運営に大きな金銭的制約を受けないという自由度がある。この意味は、予算規模に余裕があれば大きな運営をしてもかまわず、余裕がなければ小さな運営をすればよいという、身の丈にあった大会を運営側が決めることができるということである。これは、アジア・パシフィック地域の各国事情に配慮したとても強力な運営方針であるといえよう。

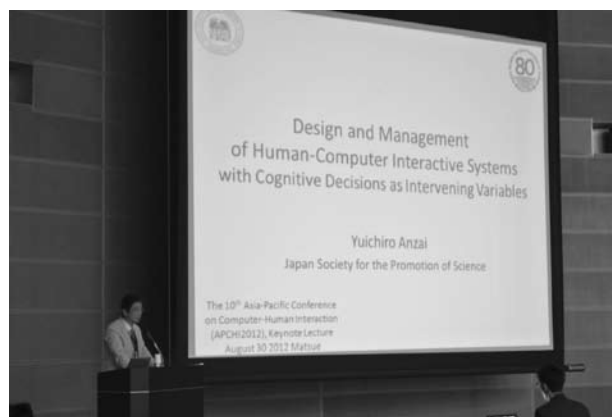
筆者のうちの辛島と郷がAPCHI2012の大会長として運

営にかかわるようになったのは、2012年に日本でAPCHIを実施するという決定がなされた後（APCHI2010終了後）であった。黒須教授が理事長を務めている特定非営利活動法人（NPO）人間中心設計推進機構（HCD-Net）が日本での開催を支援するということが決まり、理事会にて辛島と郷が大会長として選出された。この選出の理由として、理事メンバーの中では、大学所属でありかつ比較的若手であるという点が考慮されたようである。また結果的ではあるが、辛島が人間工学系、郷が情報工学系であるという背景分野のバランスもよかったと思われる。準備を開始した2010年当時は、辛島が所属している東海大学高輪キャンパスを会場とすることで会場費を低く抑え、さらには、参加者へ高い交通アクセスを提供するというを想定していた。その後、東日本大震災における福島第一原発事故によって、論文募集の時期に海外からの投稿者が減少することが予想されたため、西日本に会場を移すという議論になり、日本政府観光局（JNTO）の情報提供を受けて補助金の有無等の調査を行った結果、最終的には島根県松江市で実施することを決定した。

## 3. APCHI2012 運営上の目標

APCHI2012を運営する上で、目指すべき目標を最初に設定した。2010年に設定した目標は以下の5項目である。

1. 若手を発掘する（若手とベテランの融合）
2. 論文の質を高める（APCHIのブランド向上）
3. 参加者の満足度を高める
4. 黒字決算で終える
5. 日本のプレゼンスを高める



安西祐一郎教授のキーノートスピーチ

約2年間の準備期間、会議運営にあたって問題が生じるたびに、この5項目に立ち返って目指すべき方向を確認した。まず、運営側の観点では、大会委員を構成する場合においても若手とベテランが互いに知り合える機会として機能するように配慮した。会議のロゴマークを決定する場合には、学生デザインコンペティションを実施することで、若手への機会を提供し、論文賞については学生部門を設けた。キーノートスピーカーを依頼する場合にも、高い実績のあるHCI分野を代表する方々と、これからのさらなる活躍が期待できる方々をバランスよく配置するように候補者を選んだ。

第2と第3の項目は実は結果的には同じことを意味している。国際会議の成功は、最終的には発表された論文の質によって決まる。そのため、APCHI2012の1回での実現は困難かもしれないが、できるだけ発表される論文の質を高めるように数々の施策を行った。後述する論文特集号の設定などがこの具体例に相当する。別の側面として、個々の会議の印象を決めるは参加者のエクスペリエンスである。すなわち、いかに参加者の満足度を高めることができるかという点が重要な命題となる。委員の間でも数々の議論を行ったが、最終的には発表される論文の質を高めることが参加者の満足度を高めるという結論に至った。この会議で発表したい、魅力的な発表者と議論したいと思われることが、結果として参加者の満足度を高めることにつながるからである。

APCHIは独立採算であることから黒字決算で終えることを重要項目として設定した。開催地の変更や決定においては、この観点が大きく反映されている。例えば大会会場を当初、東海大学にしていたのは会場費を限りなくゼロに近づけるためであり、西日本での開催へと変更した後でも、自治体からの助成金の有無が最終的な開催地決定に大きな影響を与えた。

第5の項目は、会議の準備を始めてから追加したものである。委員会を構成して多数の委員が議論に参加する中で、本会議によって「アジアにおけるHCIを促進しよう。その一助としてAPCHIを運営しよう。そして、この活動を通して日本のプレゼンスを高めよう」という強い責任感と機運

が生まれた。第5項目には、APCHI2012の運営を国内で行われる単発的な国際会議ととらえるのではなく、将来のHCI分野の発展がここから加速するようという願いがこめられている。

#### 4. 組織構成

会議運営の主要メンバーが地理的に分散しており、さらには会場を松江に変更したことが、運営委員に対して大きな負担を増加させた。しかも、大会運営を赤字にしないという方針が制約を与えたため、多くの会議をオンライン(Skype)で実施することになった。このことは、逆に利点でもあり、2012年の1月からは週に1回のペースで組織運営の中心メンバーによる会議を開催することができた。

組織として足りない人材を、大会長、プログラム委員長、実行委員長(東北大学 北村喜文教授、公立はこだて未来大学 角康之教授)が相互に推薦し、段階的に強固な組織体制を作り上げた。結果的に、ベテランと若手をつなぎ、かつ、多様で広範囲なHCI領域において、数多くの人をつなぐことができたと考えている。

#### 5. プログラム委員会

前述したように、論文の質を少しでも高めることが会議の成功につながると考えたため、プログラム委員の組織化には任と福住を中心に多くの時間とエネルギーを使った。任は、技術領域での大学関係者に人脈を多くもち、直前にはIEEE ICIA 2010プログラム委員長の経験がある。特にACM SIGCHIなどの国際会議での経験を通じた人脈を活用した。福住は、標準化活動等を通して培った産業界での人脈を活用し、Industrial Sessionの企画運営など奔走した。また、論文のカテゴリ(Long talk, Short talk, Poster/Demonstration)毎に担当プログラム委員を割りあて、プログラム委員長と連携して作業を進めた。

APCHI2012の査読手続きを構築するために、プログラム委員長が主導でアジア諸国を主体としたHCI領域の専門家によるAssociate Program Chair (APC)を組織化した。APCの役割は主として専門領域の査読者を確保することと、割り当てられた論文に対するメタレビューであった。信



Poster/Demonstration 会場



晩餐会会場

頼のおける APC を選出することが、最終的には高品質の査読結果につながるため、APC の選出は特に慎重に行った。

APC の査読活動を円滑に進めるため、主として ACM の国際会議で利用されている論文投稿査読支援システム PCS を導入した。査読プロセスは HCI 分野の一流の国際会議などの査読プロセスを参考にし、投稿フォームと査読フォームも APCHI2012 用にデザインした。さらには、採択論文が ACM Digital Library (DL) に収録されるように手配することで、論文著者への魅力を増やした。

近年の東アジア諸国 (中国、台湾、韓国、シンガポール等) では、業績評価の観点からジャーナル志向が高くなっている。そのため、トップクラスでない国際会議での発表を敬遠する傾向が見られつつある。このような現状で、海外からの参加者を増やすため、論文誌の特集号を企画した。採択論文のうち、最上位の論文については、学術文献・引用索引データベースの SCI に登録されている論文誌 (具体的には、International Journal of Human-Computer Interaction 及び International Journal of Innovative Computing, Information and Control) に、上位の論文については Ei Compendex に登録されている論文誌 (具体的には、ICIC Express Letters) への推薦を行った。これによって、海外の多くの論文著者に会議への参加をアピールできたと考えている。

## 6. おわりに

これまでの APCHI は、開催された年と国・地域によって、会議の質のバラつきがみられた。今回の APCHI2012 では反省すべき点も残されているが、これまでで最高の評価が参加者より得られたと自負している。今後は APCHI の国際会議としての質がさらに向上し、名実ともアジア・パシフィック地域、ひいては世界を代表する HCI 分野の国際会議として発展することを期待している。

### 謝辞

APCHI2012 開催にあたっては数多くのご支援をいただいた。Honorary Chair をお引き受けくださった安西祐一郎教授、石井裕教授、神代雅晴教授、安田浩教授に感謝する。また、Steering Committee Chair 黒須正明教授、Kee Yong Lim 氏からは、大会運営に関して具体的かつ詳細なアドバイスをいただいた。運営についてはプログラム委員と実行委員を献身的に務めてくださった委員の皆様へ感謝する。論文の査読プロセスにおいては、APC を含めた査読者の皆様にご尽力いただいた。最後に、当日の運営には島根大学の多くの学生にボランティアとして参加していただいた。ここに改めて感謝申し上げる。

さいごに、本稿は APCHI2012 の大会長及びプログラム委員長としての考え方を述べたものである。APCHI Steering Committee の方針や意見とは部分的に異なる可能性があることを付記しておきたい。

任 向実 (プログラム委員長、高知工科大学)

福住 伸一 (プログラム委員長、NEC)

辛島 光彦 (大会長、東海大学)

郷 健太郎 (大会長、山梨大学)